

素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について

川畑 誠

1. はじめに

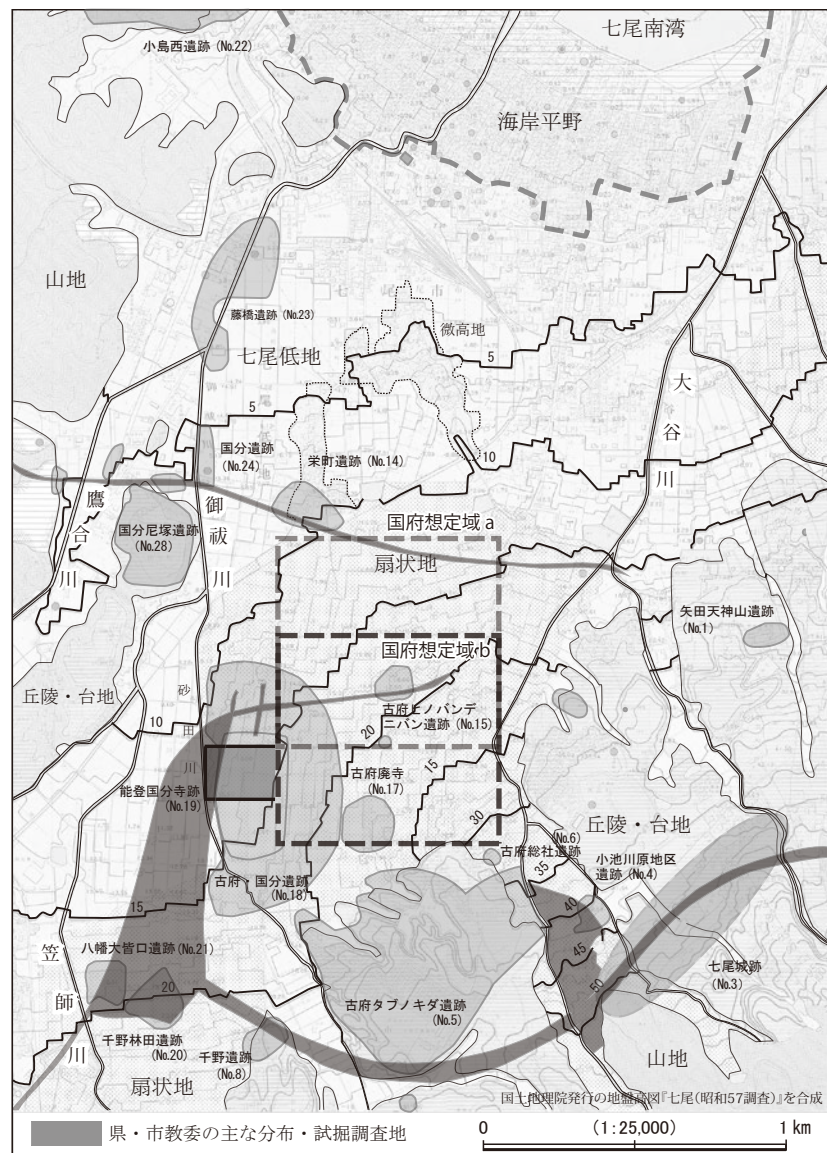
大宝元年（701）制定の大宝律令は、中央集権的な行政機構として国・郡・里（郷）制を定めた。各国には、中央から派遣される国司（守）が政務・儀式・饗宴等を行う「国庁（政庁）」と、国庁を中心として税の徴収や物資の管理・出納等の行政実務を執行する諸施設（曹司・正倉等）や国司の館等の「国衙」が置かれることとなる。一般に国府とは、この国庁、国衙、さらに役人の居住域等を含む一定の空間を指す場合が多い。また、国府内あるいは周辺地には、駅家・津等の交通施設、国分寺・国分尼寺・総社等の宗教施設、軍団等の軍事施設が、さらに各郡には郡家の諸施設（郡庁・館・正倉等）が、それぞれ配される。

古代能登国は、養老2年（718）3月に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を割いて立国（第1次立国）したものの、天平13年（741）12月に廃され越中国に併合、天平勝宝9年（757）に再び分立する（第2次立国）という経緯をもつ。2度にわたる能登立国に伴う統治機構の改編・整備は、能登国府が所在した七尾地域の集落遺跡⁽¹⁾の動向にも大きな影響を及ぼしたことは想像に難くない。

以下では、近年一定の進展をみた発掘調査成果を加味しつつ、同地域の集落遺跡の動向を概観するとともに、七尾市栄町遺跡の位置付け⁽²⁾を検討する中で感じた古代律令期の能登国の政治中枢域である国府所在地についても若干の言及を行いたい。

2. 集落遺跡の動向について (1) 地形について

今回の検討は、七尾市街地南側に広がる東西約2.5km×南北約3kmの地域を対象とする。古代の遺跡が盛衰した地域は、第1図のとおり、東側から順に、石動山系から連なる山地、その前縁に展開



第1図 地形と主な遺跡分布 (S=1/25,000)



国土地理院発行の2万5千分の1地形図（七尾）を合成

第2図 遺跡分布とグルーピング (S=1/25,000)

第1表 集落遺跡一覧表

グループ	番号	遺 跡 名	7世紀			8世紀				9世紀			10世紀			特殊な遺物の出土			備 考	引用参考文献番号
			I	II ₁	II ₂	III ₁	III ₂	IV ₁	IV ₂	V ₁	V ₂	VI ₁	VI ₂	VI ₃	瓦	帯金具	その他			
東部丘陵地域	1	矢田天神川原遺跡					詳細不明											詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	2	藤野遺跡												-	-	-		1989・90市調査。ほとんど削平か	19	
	3	七尾城跡												平	-	-		1973～2013県・市調査	23、36	
	4	小池川原地区遺跡							★					平・丸	巡方・鉄具	墨書		1989市調査 1000㎡	17	
	5	古府タブノキダ遺跡							★					丸	-	-		1982・2013県調査 各1,000㎡	11、15、22	
	6	古府総社遺跡												丸・平	-	-		詳細不明	11、15	
	7	千野高塚遺跡												-	-	-		1985市調査	14	
南部丘陵地域	8	千野遺跡												-	-	-		2011・12県調査・4,400㎡。整理作業中	31、33	
	9	千野廃寺												丸・平	-	-		1974・2003・04市確認調査	6、11、15、34	
	10	千野大聖寺平遺跡																詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	11	(千野A遺跡)																時代不明。土師器散布	-	
	12	国下柳田遺跡												-	-	-		1974県・市調査 200㎡	5	
	13	国下遺跡																詳細不明。須恵器散布	-	
古府扇状地地域	14	栄町遺跡											★	-	-	墨書・円面硯		2003～05・08県調査 9,420㎡	38	
	15	古府ヒノバンデニバン遺跡												-	-	木簡・墨書		2013県調査 3,900㎡。整理作業中	37	
	16	古府遺跡																1995市調査	-	
	17	古府廃寺												丸・平				詳細不明	11、15	
	18	古府・国分遺跡								★				丸・平	○	瓦塔・斎車		1994以降県・市調査。一部整理中	22、32、39	
	19	能登国分寺跡・国分廃寺					★							丸・平	-	瓦塔・泥仏・木簡		1970以降市調査。法起寺式伽藍配置	11、15、16、22、32	
国下扇状地	20	千野林田遺跡										★		丸	巡方1	円面硯		2006・07・13市調査 5,550㎡	27	
	21	八幡大皆口遺跡												-	巡方1	瓦塔1		2004・05・07・08市調査 7,560㎡	29	
	23	藤橋遺跡											★	-	-	-		1989県調査 1,800㎡	20	
	24	国分遺跡												-	-	-		1996～99・2004県調査 4,540㎡	28、35	
	25	国分B遺跡												-	-	-		2004県調査 3,850㎡	35	
	26	国分高井B遺跡												-	-	-		1980県調査 200㎡	7	
	27	国分高井山遺跡												-	-	斎車		1983市調査	12	
徳田台地地域	28	国分尼塚遺跡												-	-	-		2005県調査。須恵器散布	25	
	29	細口瀧田山遺跡												-	-	-		1977～81市調査。竪穴建物が単独立地	9	
	30	八幡塔地面遺跡																詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	31	八幡菅谷遺跡					★							-	-	-		1979市調査	8	
臨海地域	22	小島西遺跡												-	-	木製祭祀具、墨書、獣骨		2002～04県発掘調査 6,610㎡	24	
その他	32	江曾池の原遺跡																詳細不明。土師器・須恵器散布	-	
	33	赤浦大割遺跡												-	-	-		1996県調査。製塩遺跡	22	

★印：掘立柱建物主軸が北を指向し始める時期

瓦出土時期

存続期

する標高15～60mの丘陵・台地、中央の邑知地溝帯に属する幅1～1.5kmの平野、眉丈山系に連なる徳田台地や中能登丘陵が、ほぼ南西－北東方向に並行し、おおむね東側から西側に、また南側から北側に向けて標高を減ずる。また平野部は、南側から順に、笠師川が形成した小扇状地（本稿では国下扇状地と仮称）、北接して旧大谷川が形成した古府扇状地（扇径約1.5km）が展開し、標高10m以下の七尾低地を経て、現市街地が立地する臨海部の海岸平野、そして七尾南湾に至る。笠師川等の河川は、扇状地を北西方向に流下し、徳田台地に遮られて北側に流れを変え、御祓川に合流、七尾低地右岸に自然堤防及び後背湿地を形成しつつ、七尾南湾に注ぐ。

(2) 集落遺跡の動向について

集落遺跡については、主に7世紀前後～10世紀中葉に盛衰した遺跡を検討の対象とする⁽³⁾。当該地域の遺跡の分布は、第1図に主な分布・試掘調査地を示したとおり、県教委による能越自動車道（七尾水見道路）、藤橋バイパス、七尾バイパス、能登歴史公園等に伴う調査や、市教委による能登国分寺跡周辺確認調査、ほ場整備・民間開発に伴う分布・試掘調査等により、地域的な粗密は否めないが、かなりの程度進捗した状況にある。また、確認された集落遺跡のうち、記録保存措置（発掘調査）を実施した集落遺跡も少なくない。以下、立地する地形から第2図・第1表のとおり7つのグループに分け、概観する。

〔東部丘陵地域〕

標高10～60mの丘陵・台地に立地する集落遺跡で、能登臣一族の本貫地とされる矢田郷に属するものと考えられている。現在7遺跡が確認でき、うち矢田天神川原遺跡（No.1）の詳細は不明である。

藤野遺跡（No.2）は、市教委の調査で台地全体が削平を受けたため、中世末に築かれた供養塚盛土層から8世紀後半代の須恵器坏蓋片が出土したにとどまる。七尾城跡（No.3）は、能登畠山氏が拠点とした中世後半の山城・城下町遺跡である。能越自動車（七尾水見道路）関連調査等で、山裾の城下

域から7～8世紀代の須恵器・土師器が一定量出土しており、かなり広い範囲に集落遺跡が展開した可能性が高いと考えられている。市教委の確認調査では、奈良時代と考えられる国分廃寺平瓦Ⅲ類⁽⁴⁾1点が出土している(第3図)。七尾城跡に西接する小池川原地区遺跡(No.4)は、8世紀代に営まれた遺跡である。市教委の調査で3×2間を主体とする掘立柱建物群が3回程度建て替えられたことが判明している。建物主軸方位はN-10°W→N-2°W→N-2°Eと変遷し、8世紀中葉以降は北を指向する。出土遺物量は多く、黒漆塗りの帯金具2点(巡方、鉸具)、轆羽口片、墨書土器「□家」「小矢」「木」、また屋根に葺く以外の目的で持ち込まれた軒丸瓦や丸瓦、平瓦(国分廃寺平瓦Ⅳ類を含む)から、官人の居宅の可能性が高いと考えられている。

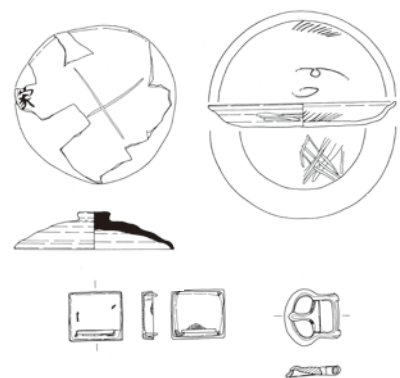
古府タブノキダ遺跡(No.5)は、一つの丘陵を占地する、東西約600m×南北約600mを測る大規模集落遺跡である。丘陵全体から奈良・平安時代の須恵器・土師器が表採されたといわれ、その南側の一角で県が調査を実施している。1982年調査では、15棟以上の掘立柱建物(SB)、柵列等を検出、少量の出土遺物を基に6世紀末頃～8世紀代における4回以上の掘立柱建物群の建て替え(1～4期)が復元されている。おおむね1・2期が7世紀代、3期が8世紀前葉、4期が8世紀中葉～後半代とされる。建物は、1期がSB5(4×3間、35㎡)・SB6(5×3間、75㎡)、2期がSB4(4×3間、49㎡)・SB13(3×2間)・SB14(4×2間、30㎡)・SB15(3×2間、30㎡以上)、3期がSB



No.3 七尾城跡出土遺物 (S=1/6)
(文献 23、36 より転載)

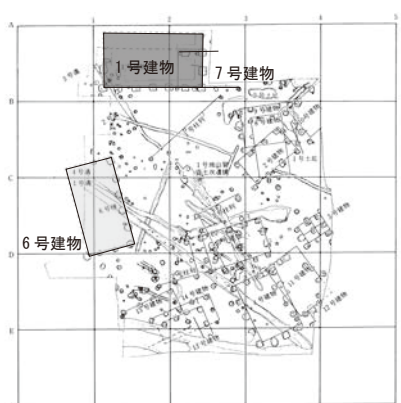


遺構配置 (S=1/1,000)



出土遺物 (S=1/6)

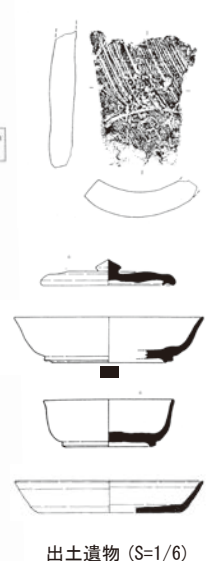
No.4 小池川原地区遺跡 (文献 17 より転載)



No.5 古府タブノキダ遺跡
遺構配置図 (S=1/1,000)
(文献 10 より転載。一部加筆。)



No.9 千野廃寺 (文献 34 より転載。一部加筆。)



出土遺物 (S=1/6)

第3図 主な遺跡の概要 1

2 (3×2間、26㎡)・SB 3 (総柱2×2間、9㎡)・SB10 (3～×3間)でそれぞれ構成される。4期は、北に主軸方位を転じたSB 7 (3～×2間、39㎡以上)から最大棟SB 1 (6×2間片面廂、97㎡)と変遷する。本建物群の性格は、従来より国府付随の関連施設あるいは郡衙等の能登郡関連施設といった位置付けがなされるが、1期SB 6を除いて、それぞれ当該期の県内の上位とされる集落遺跡でも類例をもつ建物規模を示し、少なくとも8世紀代に関しては突出した存在ではない。ここでは、4期の新しい大型建物プランの導入や建物主軸方位の転換をより評価しておきたい。2013年調査では、7世紀代の竪穴建物4棟、4×3間の掘立柱建物1棟を確認している。なお、同遺跡に含まれる南谷池からは、国府廃寺Ⅲ類の丸瓦が採集されている。古府総社遺跡(No.6)は、古府タブノキダ遺跡に北接する。能登惣社境内で平・丸瓦片(国府廃寺丸瓦Ⅲ類を含む)が表採されている。千野高塚遺跡(No.7)では、市教委の調査で7世紀後半代の長頸瓶、9世紀後半代の須恵器数点が出土している。

〔南部丘陵地域〕

標高30～50mの丘陵に立地する集落遺跡である。現在6遺跡が確認でき、No.10の千野大聖寺平遺跡～No.13の国下遺跡については詳細不明である。現集落域を中心に更なる遺跡数・規模の拡大が大いに予想できる地域である。

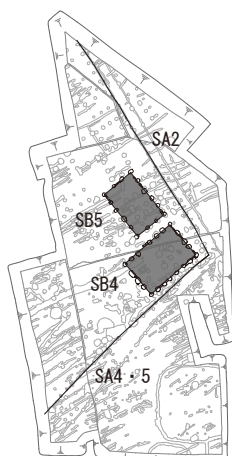
千野遺跡(No.8)は、丘陵先端部に位置する平安時代前期を中心とした遺跡である。県の調査(現在整理作業中)では、建物主軸方位から3回以上の建替えが想定され、明確に北に主軸をもつ掘立柱建物(4×2間)が含まれる。千野廃寺(No.9)は、能登国分寺跡・国分廃寺(No.19)の南側約1.4kmに位置し、8世紀初頭頃の国分廃寺平瓦・丸瓦Ⅰ・Ⅱ類の出土で、古くから知られる。市教委が2次にわたる確認調査を実施しており(第3図)、不明確ではあるが、東西約80m、南北約90mの寺院を復元し、北西側の基壇状の高まり(版築)に比較的短期間のうちに廃絶した瓦葺きの中心施設を想定する。この8世紀初頭頃に建立された中心施設の性格については、寺院(能登臣氏寺の大興寺前身寺を含む)、官衙(郡家、第1次立国時の国府を含む)など諸説がある。本遺跡からは、9世紀中葉までの須恵器・土師器が出土し、瓦葺建物廃絶後も継続的に集落遺跡が営まれる。国下柳田遺跡(No.12)は、県・市教委の小規模調査で平安時代前期の土坑・溝状遺構を確認している。

〔古府扇状地地域〕

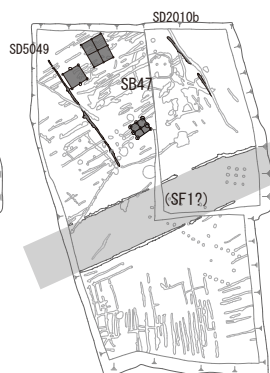
扇状地南半を主体に現在6遺跡が立地し、能登国分寺跡が立地する等、古代の中核地域の一つとなる。古府遺跡(No.16)、古府廃寺(No.17)を除き、発掘調査で各遺跡の様相が比較的判明している。

栄町遺跡(No.14)は、扇端部の微高地(標高6～10m)に単独立地する。県の調査で、東西約260mの範囲に古墳時代中期(栄町1期)～古代末(同6期)の集落が断続的に営まれ、長期間、大規模水害を受けない安定的な土地であったことが分かる。8世紀後半～9世紀初頭頃(栄町3期前半・後半)は、一辺42m以上の板塀に囲まれた区画内に伝統的な多梁間の構造をもつ大型建物が2回建てられ、第2次能登立国に伴う郡司クラスの在地有力者の居宅と考えられる。栄町3期前半(第4図)でいえば、SB 4 (7×4間、84㎡)、SB 5 (5×3間、66㎡)が主・副屋となる(建物主軸方位N-13～17°W)。9世紀後葉(栄町4期後半)は、遺跡の性格が変わり、梁間2間の大型総柱建物(SB 9・31、46・61㎡)を主屋とした2つの倉庫群(主軸方位N-5～11°W)と、真北の方位を示す幅約9mの道路(SF 1)という、2つの方位軸が並存する。倉庫群周辺から円面硯、「水」等の墨書土器、双耳環が出土する他、道路は周辺地域における新しい土地割りの施行を示すものと評価している。古府ヒノバンデニバン遺跡(No.15)は、県が調査し、現在整理作業中である。計画的に配された掘立柱建物18棟、板塀4列、竪穴状遺構2基、木樋1基等を検出し、8世紀中頃～後半に盛期をもつ短期間の集落である。西に20～25°振れる建物主軸方位と遺構の切り合い関係等から3期の変遷が想定され、うちSB07は四面廂

栄町 3 期前半
(8 世紀後半)



栄町 4 期後半
(9 世紀後半)



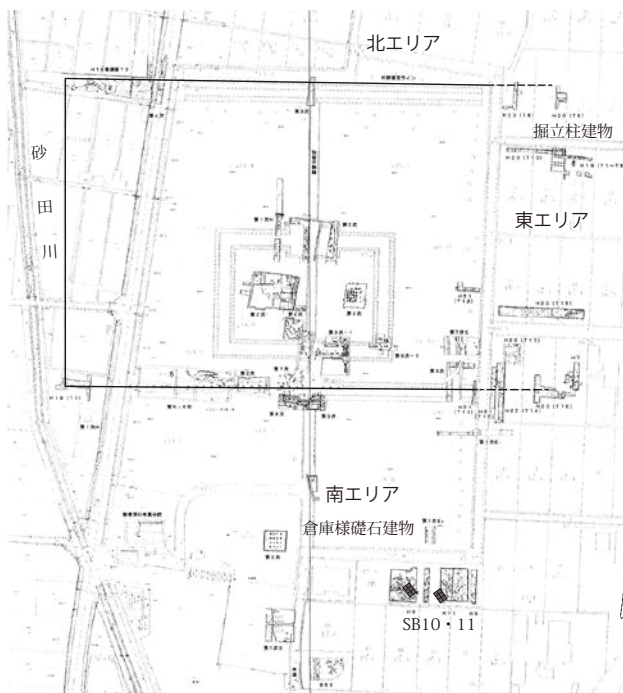
No.14 栄町遺跡 遺構配置図 (S=1/1,500) (文献 38 より転載)



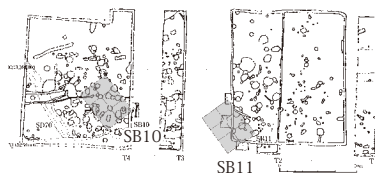
No.15 古府ヒノバンデニバン遺跡 遺構配置図 (S=1/1,500)
(文献 37 より転載。一部加筆。)



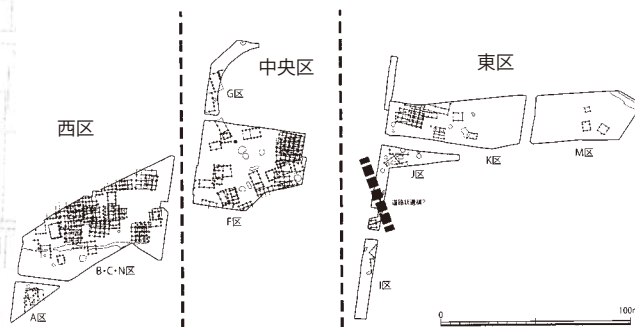
No.18 古府・国分遺跡、No.19 能登国分寺跡・国分廃寺
位置図 (S=1/6,000) (文献 39 より転載)



市教委調査区配置図



南エリア 1994・99 市教委調査 SB10・11



北エリア 県 1・2 次調査遺構配置図 (S=1/4,000)

No.18 古府・国分遺跡、No.19 能登国分寺跡・国分廃寺 (文献 22・32・39 より転載。一部加筆。)

第 4 図 主な遺跡の概要 2

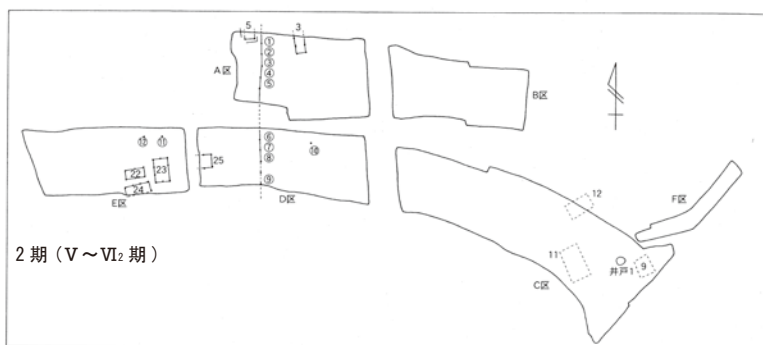
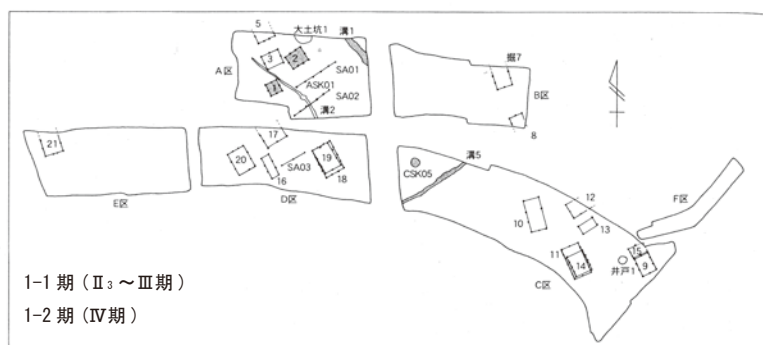
をもつ仏堂様の大型建物（廂含め 71㎡）となる。「市殿」等の墨書土器、「千字文」を記した習書木簡等、出土遺物は多様である。本遺跡は、郡レベル以上の官衙関連遺跡と位置付けられ、調査区周辺に能登国が設置した「国府市」の存在が指摘されている。古府廃寺（No. 17）では、ほ場整備の際に数点の丸・平瓦（国分廃寺Ⅳ類類似）が採集されている。木立雅朗氏は、瓦葺建物の存在を想定し、国分廃寺（No. 19）出土のⅢ類瓦は、補修のため古府廃寺から持ち込まれた瓦と位置付ける⁽⁵⁾。

古府・国分遺跡（No. 18）と能登国分寺跡・国分廃寺（No. 19）は、扇状地北西側の砂田川右岸を占地する東西約 200 m × 南北約 400 m を測る大規模・長期継続遺跡である。国史跡指定地を中心とした範囲を「能登国分寺跡」、その南北及び東側外縁に広がる遺跡範囲を「古府・国分遺跡」と区別するが、もとより一体の遺跡であり、重複部分も存在する（第 4 図）。まず、能登国分寺跡・国分廃寺（No. 19）に変遷については、白鳳末期（8 世紀初頭頃が下限か）に法起寺式の伽藍配置をもつ能登臣一族の氏寺（国分廃寺（大興寺と呼称か））が創建、奈良時代以降に定額寺に指定され、承和 10 年（843 年）に定額寺から能登国分寺に昇格する。その後、元慶 6 年（882）に大規模災害で多くの堂舎が損壊、一定の改修が行われ、12 世紀代まで伽藍配置を維持する。寺域南側を中心とした発掘調査からは、国分廃寺に先行する集落遺跡が 7 世紀中葉頃に成立すること、主要建物、伽藍配置及び寺域が数回にわたり変遷すること、定額寺あるいは国分寺昇格時に寺域全体の大規模な整地が行われたこと、9 世紀中頃～10 世紀前半の寺域が東西約 258 m（東側寺域は未確定）、南北約 163 m であること、9 世紀代の改修では塔が再建されないこと等の重要事項が判明しつつあるものの、その具体的変遷の詳細は今後の研究を待つ部分が少なくない。

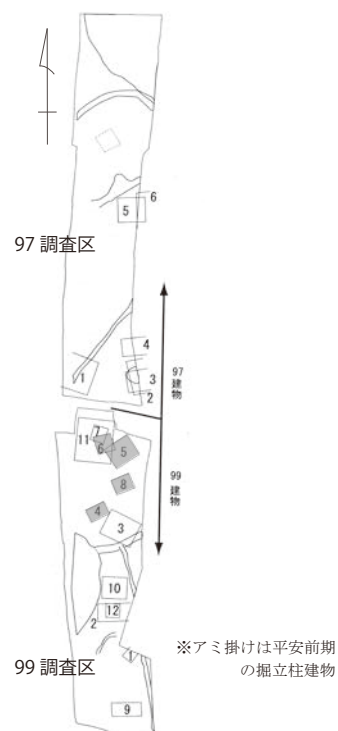
古府・国分遺跡については、寺域外側を南エリア、東エリア、北エリアに分けて述べる（第 4 図）。南側エリアでは、7 世紀後半代の 3 × 2 間の総柱掘立建物 2 棟（1994・99 年市教委調査 SB10・11、主軸方位 N-約 40° W、約 23㎡）と、真北より若干東に振れる総柱の倉庫様礎石建物 3 棟（3 × 3 間 2 棟、5 × 2 間 1 棟）を確認している。前者は国分廃寺創建以前、後者は国分寺並行期の「官衙的性格をもつ」倉庫群とされる。東エリアは、2007～11 年の市教委調査で真北より若干東に振れる側柱の掘立柱建物 3 棟（4 × 2 間、約 20㎡）等を検出、7 世紀中葉～8 世紀前半及び 9 世紀後葉以降の遺物が主体をなす。遺構密度は、南・北エリアに比べて低い印象を受ける。北エリアは、七尾バイパスに係り県が調査を行い、第 1・2 次調査の報告書を刊行している。古代の変遷は、中央区を中心に建物群が展開する古府Ⅰ期（8 世紀初頭頃～9 世紀初頭頃）を 4 小期、建物群が西区に移動する同Ⅱ期（9 世紀前半～10 世紀中頃）を 3 小期、西・中央区に建物群が分布する同Ⅲ期（10 世紀後半～11 世紀代）を 2 小期に分けており、Ⅰ期-小期 3（8 世紀後半代）と、Ⅱ期に盛期が認められる。建物主軸方位は、Ⅰ期が各小期で 26° W → 約 20° W → 15° W → 10° W と西側への振れが小さくなり、さらにⅡ期で 6° W → 4° W → 2° W、Ⅲ期で 1° W と、西側へ振れつつも北指向を次第に強める。出土遺物には陶硯・施釉陶器が多出する一方、墨書土器は限定的である。北エリアの始まりは、他エリアより若干遅れるものの、能登国分寺跡・国分廃寺（No. 19）と密接に連動しており、造営・改修や運営管理に係る施設群と理解されている。

〔国下・千野扇状地地域〕

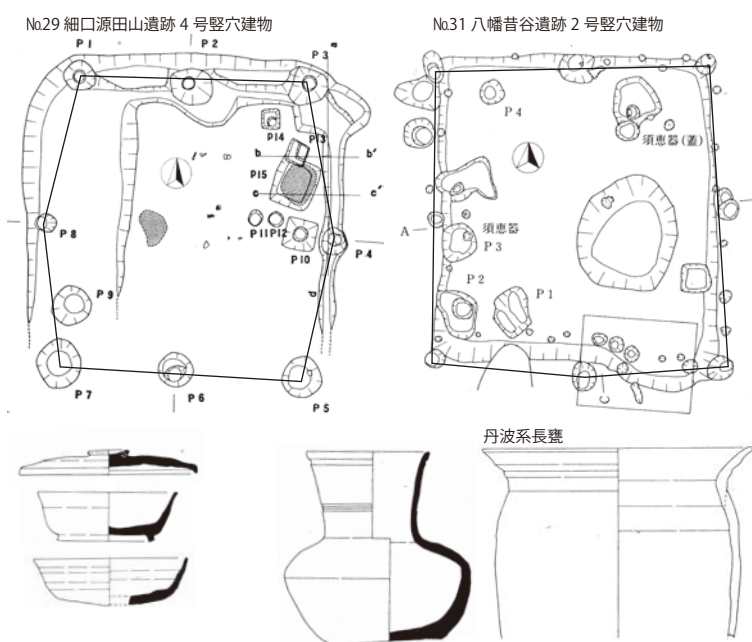
北側扇端部（標高 20 m 前後）に千野林田遺跡（No. 20）、八幡大皆口遺跡（No. 21）の 2 遺跡が確認できる。千野林田遺跡は、市教委の調査で 7 世紀末～10 世紀前半代の集落遺跡、10 世紀中葉以降の耕地を検出している。3 期の変遷をもつ集落期は、床面積約 20㎡に主体をもつ掘立柱建物 26 棟以上、板塀、井戸等で構成される（第 5 図）。1-1 期（8 世紀前半代）は、調査区北側に 3 × 2 間の SB 2（3 × 2 間、19㎡）、SB 1 等が存在する。1-2 期（8 世紀後半代）は、溝で画された複数の敷地が展開し、盛期の一つをなす。C 区南東側では SB10（36㎡）、SB14（26㎡）、縦板組みの井戸 1 が、D 区では SB18（4 × 3 間、44㎡）、SB19（3 × 2 間、34㎡）が認められ、敷地割りの主軸方位は N-16～35° W を示す。2013 年市教



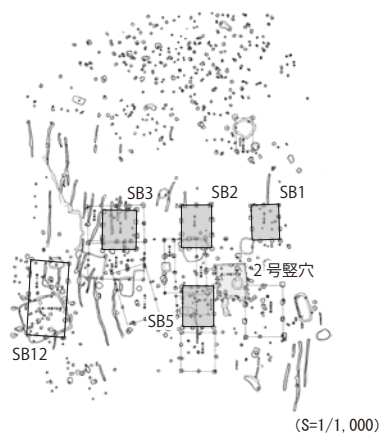
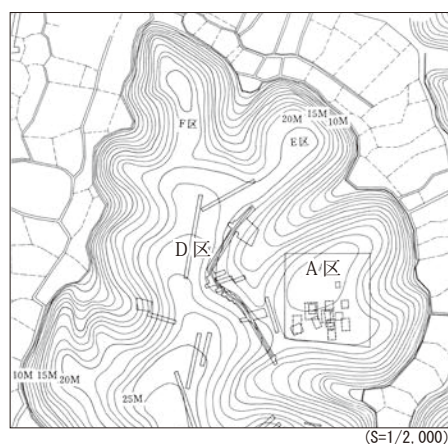
No.20 千野林田遺跡 遺構配置図 (S=1/2, 000) (文献 27 から転載。一部加筆。)



No.24 国分遺跡 遺構配置図 (S=1/1,000)
(文献 28 から転載。一部加筆。)



竪穴建物平面図・出土遺物 (S=1/100、1/6)
 (文献 8・9 から転載。一部加筆。)



No.31 八幡昔谷遺跡
(文献8から転載。一部加筆。)

第5図 主な遺跡の概要3

委調査で出土した丸瓦片1点（国分廃寺丸瓦Ⅲ類）も当該期に属しよう。2期（9世紀代）では、9世紀中葉に北を指向する敷地割りに再編され、E区SB23（3×2間、23㎡）等が展開する。北林雅康氏⁽⁶⁾は、I - 2期の掘立柱建物の増加は第1・2次立国の影響を受けたもので、国衙や能登郡衙との関連性を指摘する。また2期の敷地割りの転換を、承和10年（843年）の能登国分寺昇格と連動した「能登国分寺周辺及び関連施設の再整備」との理解し、煮炊具の定量出土から官人が居宅した可能性が高いとする。八幡大皆口遺跡は、市教委の調査により9世紀中頃～11世紀代の集落域を検出している。平安前期の主な遺構は井戸1基であり、建物は調査区外に拡がると推定される。出土遺物には瓦塔片、石製巡方各1点を含み、昇格後の能登国分寺の消長と連動した集落遺跡と位置付けられている。

〔御祿川地域〕

鷹合川と御祿川の合流地点を中心に形成された微高地（標高3～5m）に4遺跡が確認でき、ほぼ消長を同じくする。藤橋遺跡（No.23）・国分遺跡（No.24）は、県調査の出土遺物から7世紀前半代、9世紀後葉～10世紀前葉に盛期をもち、次いで7世紀末～8世紀初頭の短期間だけ営まれる。藤橋遺跡で検出した掘立柱建物は、伝統的な多梁の平面プランをもつ群（SB1～6、主軸方位N-50～70°W）と、9世紀後葉のSB7（2×1間、29㎡、同N-5°E）に分かれる。国分遺跡では、9世紀後葉～10世紀前葉の掘立柱建物4棟を検出している（第5図）。SB99-5（3×3間、32㎡）を最大棟に、建物主軸方位は14～28度西に振れる。国分B遺跡（No.25）では、県の調査で7世紀前半代のSD16を検出、7世紀末～8世紀代、9世紀後葉以降の遺物が出土している。国分高井B遺跡（No.26）は、低湿地の溝状遺構に7世紀前半代の須恵器坏類が混ざる。国分高井山遺跡（No.27）は、市教委の調査で丘陵部のA区から7世紀前半代と8世紀後半代の須恵器坏類、低地のB区から8世紀後半代の須恵器無台坏と斎串1本が出土している。

〔徳田台地地域〕

鷹合川と御祿川に挟まれた標高20～25mの台地上に立地する4遺跡が確認でき、八幡昔谷遺跡（No.31）を除いて不明な部分が多い。国分尼塚遺跡（No.28）は、県が行った丘陵北端部の調査で須恵器甕片が出土している。細口源田山遺跡（No.29）は、市教委の調査で2×2間の壁支柱竪穴建物⁽⁷⁾1棟を単独で確認している（第5図）。出土遺物から8世紀後半代に位置付けられる。八幡塔地面遺跡（No.30）は詳細不明である。八幡昔谷遺跡（No.31）は、8世紀中葉～後半代と9世紀後葉に営まれる。8世紀中葉～後半代は、A地区で掘立柱建物14棟、壁支柱竪穴建物1棟（2×2間、14.4㎡）を、D区ではA区建物群を西側で画する弧状の溝1条（延長約100m・幅約1m）を確認している。南北に主軸方位をもつ掘立柱建物は、柱穴の切り合い関係から3回以上の変遷をもち、同時期と考えられるSB1～3・5は約5m離れて配される。建物は、SB12（4×2間、39㎡）を最大棟に、3×2間、床面積20～30㎡弱に主体をもつ。また9世紀後葉については、D地区の焼土痕跡と土器の一括廃棄から祭祀行為が行われる。本遺跡の建物群は、官に係わる「屋」で構成された物資収納施設と位置付けられている。

〔臨海地域〕

基本的に集落遺跡は展開せず、祭祀に係る小島西遺跡（No.22）が立地する。県の調査で、斎串・人形・刀形等の木製祭祀具を主に用いた大規模な祭祀が長期にわたり執り行われたことが判明している。出土遺物から7世紀末～8世紀初頭、8世紀後半～9世紀初頭に盛期があり、後者の時期は国、郡、津等の官衙が関与する祭祀場と推定されている。出土遺物には人面墨書土器、牛・馬等の獣骨、「田長」「濱富」「大」等の墨書土器、円面硯が含まれる。

〔その他〕

江曾池の原遺跡（No.32）は、能登国府につながる古代北陸道（能登支路）越蘇駅推定地域に立地し、

今後の調査が待たれる。赤浦大割遺跡（No 33）は、丘陵裾に立地する8～9世紀の製塩活動に伴う遺跡である。

以上、集落遺跡の消長について述べてきたが、次のように整理が可能である。

- 1) 7世紀前後と7世紀中頃という、県内他地域と同様の集落遺跡の転換期を経て、8世紀代に続く近接した2つの中心的集落域が成立をみる。前者の時期は、東部丘陵地域の古府タブノキダ遺跡（及び七尾城跡の城下）の成立で典型的に表れる。後者の時期は、御祓川地域における他グループより濃密で優位性が感じられる6世紀代以降の濃密な集落経営の廃絶と、御祓川という同じ水系に属する古府扇状地地域における新たな集落形成（古府・国分遺跡）の形をとる。従来、東部丘陵地域からの派生と考えられてきた古府扇状地地域の集落系譜は、御祓川地域と関連がより強い可能性が高い。
- 2) 第1次立国に先立った8世紀初頭を下限とする時期に、古府扇状地地域で国分廃寺、東部丘陵地域と谷を隔てた南部丘陵地域で千野廃寺が密接な関係をもって創建される。国分廃寺周辺では、古府・国分遺跡南・東エリアの活発化に加え、千野林田遺跡や御祓川地域での新たな集落形成が始まる。一方、現時点で南部丘陵地域周辺に新たな集落形成は認めがたい。なお、寺院建立を契機として、当期以降8世紀代を通じて、栄町遺跡、細口源田山遺跡等で痕跡を残す新たな技術者集団導入の動きが進む。
- 3) 第1次立国前後に古府扇状地地域で古府ヒノバンデニバン遺跡（市・寺院関係か）、第2次立国前後に東部丘陵地域で小池川原地区遺跡（官人の居宅の一部）や寺院の建立（古府廃寺周辺）、古府扇状地地域で栄町遺跡（郡司クラスの在地有力者居宅）、徳田台地地域で八幡昔谷遺跡（郷クラスの倉庫群か）といった、これまで集落が形成されない場所において、これまで見られなかった律令的な各種遺跡が段階的に成立をみる。8世紀後半代は、国分廃寺Ⅲ類瓦の共有関係から、東部丘陵・古府扇状地の2地域が密接に連動しており、かつ他グループよりも優位性をもって推移する。一方、現時点では、短期のうちに衰退する千野廃寺周辺や御祓川地域での集落活動は、不活発化した印象が強い。
- 4) 9世紀初頭頃に新たな動きが認められ、特に東部丘陵地域の衰退が顕著である。古府ヒノバンデニバン遺跡・小池川原地区遺跡・八幡昔谷遺跡（・古府タブノキダ遺跡県調査区）が廃絶・不活発化し、何らかの行政機構の再編を予想させる。また、南部丘陵地域では千野遺跡の活動が始まるようだ。
- 5) 9世紀中頃に、能登国分寺昇格と連動するように、古府扇状地・御祓川両地域の集落遺跡が活発化、この動きは10世紀代以降も継続する。具体的には、古府・国分遺跡の充実、栄町遺跡の倉庫群転換、八幡大皆口遺跡・藤橋遺跡・国分遺跡等の通常レベルと考えられる集落遺跡の成立があげられる。
- 6) 土地利用を反映する建物主軸方位については、第1表のとおりである。8世紀後半代は、従来からの大きく西に振れる建物主軸方位が基本的に継承される中で、東部丘陵地域等の3遺跡において北を指向した建物群が点的に建てられる。一定規模をもつ広範な地域における地割り変更は、9世紀後半代以降、遷移的に進み、かつ近代に認められる地割りへの継承は限定的と想定できる。なお、古府廃寺と古府・国分遺跡における8世紀代を通じた建物主軸方位の相違は、今後とも検討が必要である。

3. 能登国府所在地をめぐる研究略史と若干の所感について

古代能登国の国府については、10世紀前半にまとめられた『和名類聚抄』に「国府在能登郡」と記されるのみで、その所在地は明らかでなく、これまでに主に2つの説が存在する。

まず、七尾市街地南方に位置する「古府」地名、能登臣一族の拠点である能登国分寺跡を軸に所在地を比定する「古府町説」がある。藤岡謙二郎氏は、歴史地理学の立場で古府集落付近の正南北の方形地割や土塁趾痕跡等から、古府地内の地籍を中心とし、国分集落の東辺を南北に走る道路（通称「中道」^{なかつみち}）を西限とする方6町程度（約640m四方）の国府を復元する（第1図国府想定域a）。そして、国府想

定域外の東南隅に能登総社が置かれ、周辺には「御禊川」「八幡」「国下」等の国府関連地名が多いとした。

2つ目の説は、2度の立国時で国府の場所が異なり（第1次立国時：国下町周辺、第2次立国時：古府町周辺）、かつ整備の度合も異なるとする立場である。門脇禎二氏は、第1次立国時に能登国司の任命がなく、越前国司多治比真人広成が按察使として能登国を所管することから、「おそらく越蘇駅か、あるいはその東北に簡易につくられた国衙」で国務を行い、現存する「国下」地名はその名残りとする。そして、天平勝宝9年（757）の第2次立国後しばらくは「原初的な国府の創設」にとどまり、「いちおう」古府町周辺での本格的な国府整備については実質的な最初の専任国司上毛野牛養が任命される天平宝字5年（761）と、相前後する760年前後より後であったと推定する。濱岡賢太郎・橋本澄夫・吉岡康暢各氏も、門脇氏の移動説を基本的に支持する。濱岡・橋本両氏は、第2次立国時の国府について国史跡能登国分寺跡に東接し、能登国総社の現在地を東南隅に置き、府域を丘陵・台地とも重複させない府域を提示する（第1図国府想定域b）。また、能登郡家について、濱岡・吉岡両氏は下町周辺の台地の集落遺跡や能登国分寺に南接する建物群等を候補地とし、橋本氏は古府タブノキダ遺跡を「第2次立国の当初のころ、国衙が既設の能登郡衙と併置もしくはその庁舎の全てを一時的に利用」した可能性を指摘する。

さて、8世紀代の古府扇状地地域中央部は、集落遺跡が希薄であり、広範な地域を網羅した統一的な新しい土地割りも見出しがたい。また、国府の有力候補地とされる古府・国分遺跡は、国分廃寺と密接に連動した遺跡と位置付けられる。これらから、古代末以降の扇状地での大規模土石流による集落遺跡の消滅や、厚さ1～2mにおよぶ中世以降の土砂堆積に起因する集落遺跡把握の困難性を考慮しても、8世紀代の古府扇状地地域における方形方格をもった国府域の想定は、かなり難しいと考えざるをえない。第2次立国の母体となった越中国府が伏木台地上に展開したように、優位性を示す東部丘陵地域（および調査事例の少ない南部丘陵地域）の丘陵・台地を中心として、国庁・国衙の主要施設が分散・点在するイメージが妥当な国府像であろう。また、9世紀代以降、東部丘陵地域における集落遺跡の廃絶が顕著に認められ、古府タブノキダ遺跡内の未調査地区や古府扇状地地域、南部丘陵地域が国府中枢域の有力な移動候補地といえるが、現時点では王朝国家期の国庁・国衙の在り方とも関わり判断は難しい。

4. 終わりに

以上、古代七尾地域の集落遺跡の消長を概観した。遺跡の一部しか知りえない発掘調査成果に重点を置いた地域史の復元には、大きな限界があることを十分認識しつつも、現時点での自分なりの整理を試みたつもりである。今後の研究の一助になれば幸いである。末文ではあるが、引用・参考させていた調査成果について十分咀嚼できなかった部分が少なからずあると思われ、御海容をお願いしたい。

註

- (1) 以下で概観する発掘調査が行われた遺跡の多くについては、調査担当者により「官衙的性格をもつ遺跡」「官衙関連遺跡」と位置付けられる場合が多い。本地域全体を俯瞰した場合、「通常の集落遺跡」が極めて少ないというパラドックスに陥り、様々な公の諸施設が想定される本地域の古代の様相を一層分かりにくくする一因にもなっている。本稿では、能登国分寺跡・国分廃寺（No.19）以外の遺跡については「集落遺跡」と呼称する。
- (2) 引用参考文献（38）による。
- (3) 年代観は、田嶋明人氏の編年（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会、同2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀 横江荘遺跡』白山市・白山市教育委員会）に基づく。おおむね、能登国の第1次立国はⅡ₃期、第2次立国はⅢ期末に比定できる。また、承和10年（843）の国分寺昇格はⅤ₂期に比定できる（第1表参照）。
- (4) 引用・参考文献（11）の木立雅朗氏分類による。本稿の瓦の年代観は、国分廃寺Ⅰ・Ⅱ類を8世紀初頭頃、Ⅲ類を奈良時代、Ⅳ類を小池川原地区遺跡出土事例から奈良時代（田嶋氏編年Ⅲ～Ⅳ期）と位置付けている。
- (5) 引用・参考文献（11）による。

- (6) 引用・参考文献 (27) による。
- (7) 細口源田山遺跡 4 号堅穴建物、八幡昔谷遺跡 2 号堅穴建物は、野々市市末松遺跡群等で検出した壁支柱堅穴建物に類する建物と考えられる。また、八幡昔谷 2 号堅穴建物出土遺物に、口縁部が外反しながら長くのびる丹波系長甕が含まれる。これらの特徴は、手工業生産技術を有した工人集団の移動を示すものとされる（望月精司 2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落－移民系煮炊具と堅穴建物構造、集落経営の視点から－」『日本考古学 第 23 号』日本考古学協会）。栄町遺跡でも飛鳥時代末頃の別タイプの壁支柱堅穴建物 2 棟（SI 5・6）が確認でき、国分廃寺建立を頂点として、7 世紀末頃～8 世紀代に同地域へ様々な技術導入が図られた状況がうかがえる。また、八幡昔谷遺跡について、移民系の堅穴建物、谷部と取り込む弧状の溝に加え、建物群北側の不規則な柱穴群をなんらかの生産作業の痕跡と評価すれば、公（郷クラスか）に関わる倉庫群以外の位置付けも検討する必要があるだろう。

引用・参考文献

- (1) 藤岡謙二郎 1969『国府』日本歴史叢書 25 （株）吉川弘文館
 - (2) 橋本澄夫・濱岡賢太郎他 1970『七尾市史 資料編第四巻』七尾市役所
 - (3) 濱岡賢太郎 1974「第一編第三章 古代の七尾」『七尾市史』七尾市役所
 - (4) 門脇禎二 1974「第二編 古代」『七尾市史』七尾市役所
 - (5) 平田天秋 1975「千野・国分遺跡」『日本考古学年報 26（1973 年版）』日本考古学協会
 - (6) 橋本澄夫ほか 1975『千野廃寺跡調査報告』七尾市教育委員会
 - (7) 中島俊一 1981『国分高井遺跡発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター
 - (8) 桜井憲弘・濱岡賢太郎 1981『八幡昔谷遺跡』七尾市教育委員会
 - (9) 桜井憲弘・濱岡賢太郎ほか 1982『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会
 - (10) 垣田修児・宮下栄仁・橋本澄夫 1983『七尾市古府タブノキダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
 - (11) 木立雅朗 1984「七尾市古府町周辺における古瓦の供給－国分廃寺（「能登国分寺跡」）を中心とした供給体制－」『石川考古学研究会々誌 第 27 号』石川考古学研究会
 - (12) 土肥富士夫他 1984『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会
 - (13) 門脇禎二 1986『日本海域の古代史』（財）東京大学出版会
 - (14) 土肥富士夫 1986『千野高塚古墳』七尾市教育委員会
 - (15) 木立雅朗 1987「資料編・石川」『北陸の古代寺院－その源流と古瓦－』桂書房
 - (16) 善端 直・木立雅朗ほか 1989『史跡能登国分寺跡－第五・六・七次発掘調査報告書－』七尾市教育委員会
 - (17) 岡田雅人ほか 1990『七尾市小池川原地区遺跡』七尾市教育委員会
 - (18) 吉岡康暢 1991（1975 初稿）「第九 能登」『新修 国分寺の研究』第 3 巻 東山道と北陸道 （株）吉川弘文館
 - (19) 善端 直ほか 1991『藤野遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
 - (20) 木立雅朗 1992『藤橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
 - (21) 善端 直 2000『能登国分寺跡発掘調査報告書－個人住宅建設に伴う緊急調査の報告書－』七尾市教育委員会
 - (22) 七尾市史編さん専門委員会 2002『新修 七尾市史 1 考古編』七尾市役所
 - (23) 善端 直ほか 2002『七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ－七尾城下範囲確認および開発に伴う事前調査名等の発掘調査報告書』七尾市教育委員会
 - (24) 安英樹 2004「調査報告 赤浦大割遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第 12 号』（財）石川県埋蔵文化財センター
 - (25) 澤辺利明 2007『七尾市 国分尼塚遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 - (26) 大西 顕ほか 2008『七尾市 小島西遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 - (27) 北林雅康ほか 2009『千野林田遺跡発掘調査報告書』、同 2015『千野林田遺跡（G 地区）発掘調査報告書』七尾市教育委員会
 - (28) 松山和彦ほか 2010『七尾市 国分遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 - (29) 北林雅康ほか 2010『八幡大皆口遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
 - (30) 七尾市史編さん専門委員会 2011『新修 七尾市史 14 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』七尾市役所
 - (31) （財）石川県埋蔵文化財センター 2012『石川県埋蔵文化財情報 第 28 号』
 - (32) 北林雅康七尾市教育委員会 2012『史跡 能登国分寺跡発掘調査報告書－平成 19 年度～23 年度の範囲確認調査報告－』七尾市教育委員会
 - (33) （公財）石川県埋蔵文化財センター 2013『石川県埋蔵文化財情報 第 30 号』
 - (34) 泉 妙宗・北林雅康ほか 2013『七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ－平成 14～24 年度事前調査等の発掘調査報告－』七尾市教育委員会
 - (35) 布尾和史ほか 2014『七尾市 国分遺跡 国分 B 遺跡』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
 - (36) 干場 勉 2014『七尾城跡（P 11・旧市道区）』七尾市教育委員会
 - (37) （公財）石川県埋蔵文化財センター 2014『石川県埋蔵文化財情報 第 32 号』
 - (38) 川畑 誠ほか 2015『七尾市 栄町遺跡』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
 - (39) 久田正弘・和田龍介 2015『七尾市古府・国分遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
- ※能登国分寺跡関連発掘調査報告書は、紙面の都合により文献 (22) で代表させ、一部を除き割愛したい。